

《2019 年 9 月（通算 277 回）月例会報告》

シンガポールで感じたこと②

ー13 年ぶり 2 度目の APYLS（アジア太平洋青少年リーダーズサミット）引率を通してー

中塚義実（筑波大学附属高校／NPO法人サロン2002理事長）

【日 時】2019 年 9 月 26 日（木）19：10～21：10（終了後は「旺達」～23：30 ごろまで）

【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室（〒112-0012 東京都文京区大塚 1-9-1）

【テーマ】シンガポールで感じたこと②

ー13 年ぶり 2 度目の APYLS（アジア太平洋青少年リーダーズサミット）引率を通して

【演 者】中塚義実（筑波大学附属高校教諭／NPO 法人サロン 2002 理事長）

【参加者（会員・メンバー）7 名】

小池靖（在さいたま市／サッカースポーツ少年団指導者）、笹原勉（日揮(株)）、関秀忠（元生徒／弁護士）、徳田仁（㈱セリエ）、中塚義実（筑波大学附属高校）、野口亜弥（順天堂大学）、皆川宥子（東京大学大学院）

【参加者（未会員）6 名】

鎌倉芳信（元筑波大学附属高校教諭）、浅見道明・今西智津子（筑波大学附属高校教諭）、塩田玲子・古澤壮太郎（元生徒）、村本ひろみ（麻布高校）

注）参加者は所属や肩書きを離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するために便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。ご本人の了解が得られた範囲で公開しています。

【報告書作成者】中塚義実（筑波大学附属高校教諭／NPO 法人サロン 2002 理事長）

【目 次】

はじめに	2
Ⅰ. 2006年（13年前）のシンガポールとAYLS（アジア青少年リーダーズサミット）	3
Ⅱ. 2019年のシンガポールとAPYLS（アジア太平洋青少年リーダーズサミット）	8
Ⅲ. 主催校のHCI（Hwa Chong Institutionホワチョン校）	15
Ⅳ. 13年ぶり 2 度目のシンガポールで感じたことー“変化”と“壁”と“危機感”	26
Ⅴ. ディスカッション	27
補足資料	30

はじめに 注) 文中、発言者名が明示されていない部分はすべて演者(中塚)の発言箇所

ここは筑波大学附属高校で、取り上げるテーマも筑波大学附属高校に関係しますが、主催は NPO 法人サロン 2002。学校とは無関係の団体で、学校をお借りして毎月月例会をやっています。今日が通算 277 回目。月に一度やってこの回数になるということは、相当昔からやっているということですね。1997 年度からこの名称で活動し、2014 年度に NPO 法人化。「スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”」を“志”に掲げ、月例会以外にもさまざまな事業に取り組んでいます。

今日のお題が「シンガポールで感じたこと②」となっているのは、その前に①があるということです。2006 年、筑波大学附属高校初の国際交流事業の引率報告でした。筑波大附属でいう 116 回生が高校 2 年生の時です(注:いまの高校 1 年生が 130 回生)。そのとき以来、13 年ぶり 2 度目の引率で、ちゃんと皆様に報告せなあかなあと思い、今回の報告会に至りました。

いつも異業種の人々が集まる会ですが、今日は学校関係者が多く集まりました。けど初対面の人がほとんどだと思うので、自己紹介してもらった上で中身に入っていきたいと思います。

笹原: サロンの理事。仕事は日揮というプラントエンジニア会社。横浜で働いているけどヤンゴン事務所長も兼務している。シンガポール含めアジアはあちこち行っている。

徳田: サッカー専門の旅行会社だが、今年はバスケのワールドカップと、いまやっているラグビーのワールドカップにも手を出している。ラグビーは始まったら急に盛り上がり、用意していたチケットが全部なくなり再入荷しようとしたらえらく高くなっている。シンガポールはワールドカップの予選でしか行ったことはない。セントーサ島のマーライオンが解体されるニュースが気になっている。

今西: 本校教諭 3 年目。本校卒業生でもある。そちらにいらっしゃるお二人と同学年(110 回生)で隣のクラス。シンガポールは今年 3 月、1 週間の短期交換留学の引率で行ったのが初めて。

皆川: 本校 122 回卒業生。高 3 の時に国際交流でノルウェーのリレハンメルに行かせてもらった。いまサロンの事務局を担当。大学では木造建築の研究に取り組み、いま修論真っ只中。

塩田: ここの卒業生で中塚先生に教えていただいた。Facebook でこのイベントを知った。会社員。

古澤: 同じく 110 回生。所属は IT 会社だが。いま出向で内閣府におり、主に教育問題に取り組んでいる。「これからの教育について語りたい方」という案内文にひかれて参加した。

関: 23 年前にこの高校を卒業した弁護士。シンガポールはこの 8 月に行っていた。先ほど話に出たセントーサ島も行ってきたが、今日のマーライオン解体のニュースを見てびっくりした。

浅見: この学校で英語を教えている。いま再任用。APYLS には 3 年前に引率。126 回生担任として修学旅行でも行ってきた。

村本: 麻布高校の国際交流を担当。今回中塚先生と一緒に引率。杉浦という社会科の教員がいつもは行くのだが、今回初めてシンガポールの引率に行くことになった。

鎌倉：この学校の元教諭。今年の 3 月まで国際交流に携わってきた。サロン 2002 にはほとんど関わっていないけど、シンガポール交流の初期のことを知っているの今回声がかかったのだろう。シンガポールには 2002 年に行って以来、自分で数えてもわからないぐらい何度も行っている。

今日はまず「2006 年のシンガポールと AYLs（アジア青少年リーダーズサミット）」について振り返り、その先は「2019 年の APYLS（アジア太平洋青少年リーダーズサミット）」「主催校の HCI（ホワチオン校）」「13 年ぶり 2 度目のシンガポールで感じたこと① “変化” ② “壁” ③ “危機感”」の順に進めます。最後のところがディスカッションになります。

B5 判の冊子は、麻布の村本さんがまとめてくださいました。現地にいるときから報告書（文集）のなかみの話をし、早めに生徒に原稿を書いてもらい、8 月中にはほぼできていました。この手のものだと画期的なスピードです。今回配布したものが改訂版です。

これらを参考資料としながら、スライドをみていきたいと思います。

I. 2006 年のシンガポールと AYLs（アジア青少年リーダーズサミット）

■2 枚の写真から

この写真はシンガポールの大統領府で撮ったものです。中央にいまの大統領がおられます。女性の方です。村本さんと中塚がここにいます。中塚の前の生徒は背が高く、私はあまり顔が写っていません。

こちらは 13 年前のホワチオン校、図書館での集合写真です。鎌倉先生が若い。麻布の鳥越さん、本校物理科におられた鈴木さんがいます。いずれも病気で亡くなりました。

鈴木さんの隣は、周恩来の出た学校、中国天津市南海中学のヘーさん。英語がまったくできないけど、私は彼とコミュニケーションを取って一緒に筋トレをしました。夜の集いにヘーさんが、HCI に留学中の生徒を連れてやってきたこともあります。本校英語科におられた箱守先生も写っています。その横にはサウジアラビアのサードさん。キングダムスクールの副校長（Vice President）と言っていました。

サウジアラビア人は勝手に集団でいなくなるなど謎の行動が目立ちました。1 日 5 回もお祈りをする人たちで、金曜日には特別なお祈りをする習慣があるということを、当時の私たちはあまりよく知りませんでした。アン校長もおられます。今回 13 年ぶりにお会いしました。



2019 年 7 月 22 日 イスタナ（大統領府）にて全員集合



中塚は初日、サッカー関係の何かと重なり 1 日遅れでシンガポール入りしたのでこの写真には写っていません。チャンギ空港に着いたら HCI の人が迎えに来てくれただけでなく、個人的にアルビレックス新潟シンガポールの人に連絡してあったこともあり、クラブのマネージャーまで来てくれて、いきなり熱烈歓迎を受けた記憶があります。

2006 年の夏です。このときは「アジア・ヤング・リーダーズ・サミット (AYLS)」と呼んでいました。この前の年に主催のホワチョン・インスティテューション (HCI) がリニューアルし、この行事が始まります。おそらく学校を挙げて、気合いを入れてはじめた行事なのでしょう。

私は 116 回生の担任をしていました。担任長は今日来られている鎌倉先生です。2 年生の時にこの話があり、担任クラスの天野君が参加することになりました。ふつうは部活があって引率どころではありませんが、サッカー部の合宿にも大会にもかからないし、クラスの生徒が行くのだし、シンガポールにも興味があつたので立候補して行かせてもらいました。HCI の寄宿学校に約 2 週間。2 度の週末を含め自由時間がけっこうあつたので、かなり自由に動き回りました。マレーシアのジョホールバルにも一人で出かけました。参加国はアジアの 6 개국。日本からは麻布と下関西と筑波大附でした。

■AYLS (アジア青少年リーダーズサミット) のはじまり

この行事の立ち上げのところから深く関わっておられる鎌倉先生に、始まりのころの話をお聞きたいと思います。

鎌倉: 先ほどの集合写真、アン校長先生の横、ちょっと色黒の方がシンガポールの教育大臣のタンさん。

のちに教育大臣から、日本で言う通産大臣になられた方です。HCI がリニューアルしたときに、何か新しい企画をしたいといういろいろ検討しました。そのときにタンさんから「将来のアジアのリーダーをつくるための国際交流プログラムをしたらどうか」と話がありました。たまたまタンさんの息子が HCI の生徒だったこともあり、政府の支援を受けながら、HCI がアジアのリーダーをつくる、ネットワークをつくる企画として始まりました。当初は各学校から 5 名。なぜうちの学校が選ばれたかは、私の推測ですが、当時のシンガポール大使の小島さんが本校の卒業生だったことが関係しているのではないかと。麻布についてはよくわかりません (村本: ABC でもあいうえおでも最初に来るからじゃないですか?)。下関西は山口県、長州藩。政治家のルートがあつたのではと推測します。麻布とうちはいまも続いています、下関西は「英語力がない」ということで途中で切られました。あきがあれば参加させるけど、ということになっているようです。

2006 年 1 月に、アン校長先生とリ・カイシンさん (野外教育の先生。リさんはいま国際交流の窓口)、ショウさん (AYLS の担当者。いまは学校を離れている)、およびシンガポール大使館の人が来校され、こういう企画をするけど参加してもらえないかとの打診がありました。校内でもいろいろもめました。結局本校から 5 名を送ることになります。たまたま我々が 2 年生の担任団ということもあり、担任団で責任を持って引率するからということで校内的な承認を得ました。麻布は鳥越先生が中心になって 5 名来ました。

HCI もこの企画が果たしてうまくいくのかを危惧していました。はじめてのことだし、中国、サウジ、マレーシアなどいろんな国から高校を招くのは初めてなので、果たしてうまくいくのか、いつまで続くのかを危惧していました。たまたま本校で生徒の希望をとったらかなり多く、3 月に私、貴志先生、箱守先生と 3 名で現地に行ったときに「希望者が多いので 5 名から 8 名に増やせないか」とアン校長に折衝します。「実は 5 名というのは政府の補助があり、定員を決めているので、これ以上増やすのは無理」とのこと。では「別の形で交流しませんか」という話になり、そこで生まれたのが短期留学です。その年からスタートしました。AYLS は 7 月開催で 5 名を派遣。その年の 12 月に男女 2 人ずつ 4 人の生徒 (スーミー、リサ、ベンジャミン、マース) が HCI から来校したのがはじめての短期交流

で、いまでも続いています。

いまは HCI でもこの事業が軌道に乗り、自信を持って進めています。いろんな国が入ってきたので、最初は日本の高校から 5 名でしたがいまは 3 名ずつ。日本からは麻布とうちで合計 6 名です。スタートの経緯はこういうことです。

中塚：AYLS が 20016 年 7 月。その年の 12 月に HCI から 4 名の生徒と引率教員が来て、2007 年 3 月にこちらから HCI に出かけます。選考から漏れた生徒を対象にした短期留学のスタートですね。ちなみになぜ日本人教師が 3 名もいるかというと、鎌倉さんはそれまでの経緯があるので引率者として前半に参加。鈴木さんは物理オリンピックの引率でシンガポールに来ていました。学校からの派遣ではありません。日本がはじめて参加した物理オリンピックがシンガポールのどこかの大学であり、ちょうど終わったぐらいのタイミングで AYLS が始まったので、そのまま数日滞在していたのです。箱守さんも前半の引率で、後半は山田研也さんが入れ代わりで来ました。中塚は一日遅れで参加して最終日までいたので一番長くいたことになります。初の国際交流だったのでみてこないといけないということと、ちょっと心配だったこともあり、担任団が入れ替わり出かけていきました。多くの人が参加したおかげで、自由度も高かったですね（笑）。麻布はこの当時どうだったのでしょうか。鳥越さんが引率で来られました。

村本：基本的にはお誘いを受けたので試しに行ってみようという感じです。うちは 1995 年からカナダや中国と交流して姉妹校提携もあったので、これ以上増やすのはどうかとの議論もありましたが、お誘いを受けたのでそれなら受けてもいいかということになりました。ノリのいい子が集まった感じですね。英語ができる子とできない子が半分ずつですね。

中塚：そのときの麻布の生徒に、文化祭か運動会の委員長がいて…。何かあったんですよね。

村本：運動会後にお酒を飲んだことがあって、その後始末をした子ですね。彼が飲んだのではなくて…

鎌倉：あとで丸坊主になってましたよね（笑）

村本：はい

中塚：立ち上げのところはいいですか？

■2006 年の AYLS（アジア青少年リーダーズサミット）概要

いまでも話がありましたが、この行事のねらいは次のとおりです。

- ・国際的な視野を持った青少年を育成する
- ・アジア諸国の青少年がお互いの交流を通して相手の国を理解する
- ・アジアのヤングリーダーに、国境を越えた強いネットワークをつくる
- ・アジアの将来の指導者を育成する

プログラムを改めて見てみると、週末が 2 回あるぐらいのゆったりスケジュールです。毎日テーマがあり、皆で動くことが多かった気がします。週末は基本的には仕事ではなく、生徒は観光とか自由時間があり、教師もちょっとフリーになります。そんな感じの 2 週間でした。

先ほどと同じ、イスタナ（大統領府）で撮った集合写真です。中央が、前の大統領。私が絆創膏をつ

けているのわかります？ 当時はゆとりがあったので、生徒たちもよく遊んでいました。ミニサッカーをやっているところに私も入れてもらって一緒にやったのはいいけど、サウジアラビアの高校生にひじ打ちを食らい、額が割れて絆創膏を貼っているところです。私の後ろに山田先生がいます。鎌倉さんと入れ替わりですね。

これが日本チーム。下関西もいます。右端が山田先生。中央が大統領です。



2006 イスタナ（大統領府）にて



2006 の日本チーム。当時のシンガポール大統領と

これは引率の先生と写真を撮ったところです。いまサウジは来ませんが、このときはキングダムスクールとその女子校が来ていました。国内では男女の接触が固く禁じられているのに、シンガポールでは異国の解放感からかメチャクチャはじけていました（笑）。

引率のサードさんはサッカー狂で、私とはそこでつながってきます。ちなみに 2006 年の FIFA ワールドカップ・ドイツ大会には日本とサウジアラビアが出場していました。他のアジア人は羨ましがっていましたね。



AYLS : 参加国と参加校
 ○サウジアラビア(2校) ○中国(4校)
 ○インド(4校) ○日本(3校)
 ○マレーシア(2校) ○シンガポール(4校)



左から留学生、鈴木氏、鳥越氏、へーさん、中塚



小学校を視察した時の様子

鎌倉先生の部屋でくつろぎながら一杯やっていたら（鎌倉：ほんとに禁止なんだけど）、へーさんが自分の学校の留学生を通訳として連れてきたこともありました。鳥越さんと鈴木さんもいますね。

教師のプログラムも充実していました。どこかの学校の見学に行ったところだと思います。鳥越さんは疲れ切って眠っていますね。

鎌倉：向こうの小学校の見学に行った時の写真です。つくりが小学校ポイでしょ。短冊が飾ってある。

中塚：教師向けのプログラムも、試行錯誤ではあったけど一所懸命用意してくれていた記憶があります。

HCIの授業参観もありました。せっかくなので参観だけでなく授業をやらせてくれと言って、体育のサッカーの授業をひとコマやらせてもらいました。ブラジル体操に始まって、ボールフィーリングのところを中心に。アルゼンチンのユニフォームを着て張り切っているのがサウジアラビアのサードさんです。「フットボールをやるぞ」と言ったら彼も入ってきて一緒にやりました。ビデオを撮っているのがりさん。今回も再会しました。鳥越さんもいますね。



■教師向けプログラム（番外編）

教師向けプログラムは教育機関を訪問したりシンガポール日本人会へ行ったり…。これがオフィシャルなものです、番外編があります。シンガポールと言えば、アルビレックス新潟のブランチが、この頃からシンガポール国内のサッカーリーグ、Sリーグに入ってやっていました。いまはめちゃくちゃ強くなり、昨年度はSリーグで優勝しました。するといろいろな軋轢が生じるもので、今年は日本人枠の制限などがあるようです。2006年はSリーグへ参入したばかりで、元サロン会員の長岡さん経由でマネージャーを紹介してもらい、事前に連絡を取っていたのはすでに話した通りです。そして期間中、何度かアルビレックスのコーチやスタッフと会食しました。

Sリーグの観戦もしました。土曜日にアルビのホームゲームがあり、チケットをもらったので引率の先生に声をかけたところ、サウジのサードさんとインドのゴータマさんが乗ってきて、山田さんも含めて4人で観戦。ハーフタイムにスタンド裏で飲食でき、ゴータマさんとはビールで乾杯しますが、サードさんにビールを渡すとおおいをかいで、「これはアルコールか？ アルコールはダメだ！」と拒否されました。さすがイスラム総本山のサウジアラビアのキングダムスクールの Vice President。いい加減なことはできません。

日曜日は、一人でマレー鉄道に乗ってジョホールバルに出かけました。このときのシンガポール駅は、いまも遺跡として残っていますが使われていません。マレー鉄道の終着駅は別のところにあります。シンガポールの隣がジョホールバル。ジョホールバルに着いたら別世界の感じがしましたが、いまは近代都市になっているようです。目的地はもちろん、日本がワールドカップ初出場を決めた、ラーキンス

タジアム。岡野が決勝ゴールを決めたゴールがあります。スタジアムには、あのときにもおったという会場のおっさんがいて、「あの時はすごかったぜ」という話をしてくれました。

よく考えてみると、これらの間、生徒をほっぽり出している。のどかな時代ですね。



左からゴータマ氏、中塚、サード氏、山田氏



マレー鉄道に乗って出かけた

II. 2019年のシンガポールと APYLS (アジア太平洋青少年リーダーズサミット)

1. 概要

今回の引率教員はこのような顔ぶれでした。チャイナドレスのミニスカートをはく若い女性もいます。全体的にみると私が長老のような感じ。13年もたつとそうなるんですね。

実は2007年から APYLS となり P が入ってきました。いまや14カ国27校。アジア諸国だけでなく、オーストラリア、アメリカ、イギリス、フランス、フィンランド、南アフリカが参加します。学校名は資料にあるとおりです。うちの学校と関係ありそうなのは中国の北京第二師範附属です。日中交流でたびたび訪問させてもらっています。UKは、前はハロー校が来たようですが今回はこういう学校です。シンガポールからは HCI はじめいくつかの学校が参加しています。

スケジュールも、2006年と2019年を対比してみるとわかりますが、今年は1週間コースでした。Day0からDay6まで。お別れしてそのまま帰るとシンガポール観光ができないので、うちはお別れ翌日に市内観光しました。麻布は前乗りですね。

なかみはかなり洗練されていると感じました。Bridges というのが大きなテーマで、Connecting Possibilities, Redefining Our Future というスローガンのもと、8つのグループに分かれて活動しました。



AYLS 2006		APYLS 2019	
6か国19校 約80名		14か国27校 73名	
○サウジアラビア (2校)	■ インド (2校)	■ オーストラリア (1校)	
○インド (4校)	■ マレーシア (1校)	■ アメリカ (3校)	
○マレーシア (2校)	■ 中国 (3校)	■ イギリス (1校)	
○中国 (4校)	■ 日本 (2校)	■ フランス (1校)	
○日本 (3校)	■ 韓国 (1校)	■ フィンランド (1校)	
○シンガポール (4校)	■ インドネシア (1校)	■ フィリピン (1校)	
	■ シンガポール (7校)	■ 南アフリカ (2校)	

グループのことを「ストランド strand」と言っていましたが、上位のものを達成するための要素という意味でしょうか。あらかじめ与えられたお題について調べ、現地でディスカッションし、その内容をまとめて発表する。これの繰り返しです。

2006 AYLS	2019 APYLS	「討議」と「発表」が中心 Bridges: Connecting Possibilities, Redefining Our Future
○ 7月16日(日) ようこそ! ○ 7月17日(月) 開会 ○ 7月18日(火) 仲間づくり ○ 7月19日(水) 経済 ○ 7月20日(木) 環境 ○ 7月21日(金) 教育 ○ 7月22日(土) 観光(北九州) ○ 7月23日(日) 観光(市内) ○ 7月24日(月) メディア ○ 7月25日(火) 金融 ○ 7月26日(水) 研究 & 社会 ○ 7月27日(木) 政治 & 経済 ○ 7月28日(金) 文化交流(お別れパーティ) ○ 7月29日(土) お別れ	○ 7月20日(土) Day 0 ○ 7月21日(日) Day 1 観光 & 市内観光 ○ 7月22日(月) Day 2 開会 ○ 7月23日(火) Day 3 ○ 7月24日(水) Day 4 ○ 7月25日(木) Day 5 ○ 7月26日(金) Day 6 お別れ 7/28 1:50 離陸 ○ 7月28日(日) AM 帰国	○ The Faces of Inequality ○ Achieving Racial and Religious Harmony ○ Coming Together for Climate Action ○ The 22nd Century Classroom: Rebuilding Our Education System ○ Globalization and Protectionism: The Future of the Global Economy ○ An Automated Future: The Fourth Industrial Revolution ○ New World Order: The Changing Nature of International Relations ○ Mental Health: Building a Supportive Community

8 つのうちの一つのお題が各国に与えられており、事前にポスターを作ってくることになっていました。日本のお題は New World Order。日本チームで何度も集まってポスターを作りました。このポスターセッションが DAY1 からいきなりはじまり、優れたポスターは大統領の前で発表できるのでみな気合が入っていました。

村本さんがまとめてくださった資料の 2 ページを見ていただくと、生徒たちの事前準備の様子がわかります。このうち 6 月 9 日(日)はサロン 2002 も関わりました。体育館で U-18 フットサル都大会の最終日があったこの日、学校の情報教室では麻布と附属の生徒がポスター作りをしており、夕方からは NPO サロンの年次総会です。生徒たちには「作りかけのものでいいから日本語でプレゼンしてくれ」とリクエストをしました。

関さんもそのとき来てくれたけど、何のことかわかってましたか？ 謎の高校生男女 6 人が何か主張している、という感じやったかな？

関：いまの話でわかりました。

中塚：彼らにとっても 2 回目ぐらいの会合で、早くも行き詰まり感がありましたが、見知らぬ大人にあだこうだ言われて刺激にはなったと思います。乗り気でない生徒もいたようですが…。最終的に仕上がったポスターがこれです。女子 3 人が筑波大附、麻布は男子校。麻布の引率は女性で附属は男性。



日本チームと日本のポスター



優秀ポスター：韓国（左）と英国（右）

2. スケジュールに沿って

ここから先は、補足資料の冊子をみながら進めていきたいと思います。

■DAY0 7月20日(土)

3 ページが Day0。

各国から集まってくる日です。

■DAY1 7月21日(日)

Day1 は日曜日です。日曜日の朝、サミットの全体説明があり、いきなりポスターセッション。各ポスターに 2 名ずつつき、あとはぐるぐる回ります。

終わってから投票をします。私がついていけなかったことの一つです。何をしているかわかりますか？

皆川さんならわかる？

皆川：QR コードでどのポスターがいいか投票する。

そのとおりです。高校生がみな、スマホをかざして投票している姿です。たぶん 110 回生の人たちもなじまないよね(笑)。われわれ教師陣は、なじんでいる人といない人がいましたね。

村本：教員は投票させてもらえなかったです。

ダメと言われました。

こうして選ばれたのが、韓国とイギリス、もう一つはフィリピン。この 3 つが優秀ポスターとして選ばれ、翌日の大統領府で発表しました。去年は日本が選ばれたようです。

この後はグループごとに市内の史跡観光。私のグループはいきなりベイフロントへ。遠景にマーライオンがみえます。13 年前のマーライオンの印象は、なんじゃこのしょぼいのは、でしたが、今回は周りに高層ビルが建ち並び、何と言ってもマーライオンの向かいに、あの有名なマリーナ・ベイ・サンズやガーデンズ・バイザベイがあり、一大観光スポットとなっています。あるのは知っていたけど、すっかり観光地になっているのをみて驚きました。

町なかを散策しながら、ドリアンを食べさせてもらいました。妙な味でにおいがすごい。ちなみにこの写真は、



スマホで投票。私はついて行けない…



中国(左)、南ア(右)の先生と



5.8 ドルの B セット

地下鉄の中の表示の一部。してはならないことの一つに「ノードリアン（罰金はなし）」があります。中山公園へ行き、ヒンズー教のお寺に行き、ちょっと安めのホーカーセンターで食事しました。5.8 ドル。安くて充実したものでした。

■DAY2 7月22日（月）

毎週月曜日の朝、HCIの前生徒4,000人が集まる全校集会があり、そこで今回の参加者が紹介されました。そこから講堂のようなところへ行き、オープニングセレモニー。ゲストは、シンガポールで一番若く大臣になって、一番長く務めているチンさん（陳振声）。穏やかな、わかりやすいシンガポール英語でした。この人がドラを鳴らして開会です。

大統領府に出かけたのはこの日の午後です。優秀ポスターのまわりで大統領との質疑が為されます。APYLSのハイライトの一つです。

学校に戻ると生徒たちはすぐにグループ討議が始まります。初日からフル回転の生徒たち。一方教師陣は、大統領府から戻ってきたら少し時間ができたので、私はジョギングに出かけました。

学校を出てすぐのところにタンカーキーという地下鉄の駅ができました。これができたおかげでグループ活動がしやすくなったそうです。その先を道沿いに下っていくと、13年前によく買い出しに出かけたお店が大きくなっています。その先を右へ曲がるとちょっとした高級住宅街が広がり、突き当りには立派な小学校があり、ぐるっと回って帰ってきました。13年前にはもっと先、HCIの裏側へ行き、写真を撮りながら走っていたら、つかまりました！前首相のゴー・チョクトンの家があるのを知らず写真を撮ってしまい、警備の人にこっち来いって言われ、写真を削除せいと言われ、削除しました。海外で不用意に写真を撮るのは注意しましょう。



■DAY3 7月23日（火）

翌日のDay3。生徒たちは「ストランド・ヴィジット」。グループごとに、自分たちのテーマに関する機関を訪問します。われわれ教師もこの日はそろってシンガポールデザイン工科大学（SUTD）を訪問することになりました。入ってすぐ、大学院生が創った建物のミニチュア版があり、この中のいくつかは実際に建てられていると言っていました。カッコいい建物がシンガポールの町なかにもいくつも建っています。

大学の中をいろいろ案内され、最新のテクノロジーとデザインの融合するところを見せてもらいました。3Dのコピーでつくったトリケラトプスは印象的でした。最後に、大学の偉い先生と思われる方が1時間ぐらい話をしてくれましたが、早すぎて何を言っているのかよくわかりませんでした。

村本：ほんとわからなかったですね。大したことを言っていないのにエラそうだし。「ディスカッションと考えることが大事だ」という話を延々1時間もしています。「5人のグループだったらできるかもしれないけど、大人数が教室にいる日本の問題としてどう考えますか」と質問したけどよくわからない回答でした。

中塚：また、話を聞いた部屋の冷房が効きすぎていてメチャクチャ寒かった…。

この日も夕食は外でした。町なかのホーカーセンター。32ドルの豪華夕食。ちょっと高いですね。



32ドルの豪華夕食。うまいが高い

■DAY4 7月24日（水）

DAY4の午前中、HCI創立100周年の記念講演がありました。前シンガポール外交部長のMr. George Yeoです。この方と生徒たちの質疑応答がすごかった！マイクのところに質問したい生徒が並んでいます。別の講演の時もそうでしたが、APYLS参加者だけでなく、HCIの生徒が堂々と質問している姿が印象的でした。



午後はCultural Exhibition（文化交流展示）。JC（ジュニアカレッジ）の建物で開かれました。参加国が机1台分のスペースで自分の国を紹介するコーナーを設けます。この日は授業が早く終わる日なので、APYLS参加者だけでなくHCIの生徒も自由にやってきます。日本のブースはなかなかよかったですね。名前のひらがなを筆で書いてあげる。「そりん」。書いてもらった子も喜んでます。書いていた麻布の金井君も、英語は得意とは言えないけどこれで気を良くした感じでした。



抹茶を点てることもやりました。村本さんは韓国のビー玉遊びをやっています。

このような時間を過ごし、夕食後に生徒たちはダイアログ4。我々教師はシンガポール動物園のナイトサファリに出かけました。これはよかったですね。



■DAY5 7月25日（木）

午前中、教師はHCIの授業見学。生徒た

ちは班の学習内容を HCI の生徒たちに発表し、午後からは自由時間となります。生徒はゆっくりできるかなと思いましたが、総括プレゼンの準備や最終日の発表準備、出し物の練習をしたりと、やはり落ち着いた一日だったようです。

夕食はボーディングスクールの食堂で鍋パーティでした。そろそろお別れムードが漂っています。名前を呼ばれた生徒と教員が呼び出され「何か面白い出し物をやれ」と。けど戻ってきたらサプライズでハッピーバースデー。麻布の出淵君が呼ばれてえらくビビっていたけど喜んでいました。

■DAY6 7月26日(金)

最終日のクロージングセレモニーの様子です。QR コードでいろんな情報が展開されます。私はついていけません。

修了証を学校ごとに代表者が出ていただき、そのあとで各国のパフォーマンス。私はフィンランドの出し物が気に入りましたね。サウナの中を再現したもので先生も出ていました。日本チームは、伝統芸能と言えるかどうか分かりませんが毎回ソーラン節。いまふうのやつです。

立派なホテルでのクロージングセレモニーはすごい盛り上がりでした。

最後に Lead Partner Organisations が紹介され壇上へ。このほかにパートナーというカテゴリーもあるようです。このように多様な企業・組織がこの行事をささえています。どれぐらい出してもらっているのかは知りませんが、現地での滞在費は全部向こう持ち。磐石の態勢で展開しているのがわかります。

ここまでの今回のリーダーズサミットの全容です。ここまでの質問や補足があれば。



寄宿学校の食堂で「鍋パーティ」



日本の出し物は、いまふうアレンジの「ソーラン節」



クロージングセレモニーはホテルのディナー

LIST OF LEAD PARTNER ORGANISATIONS

	Bina Nusantara		Singapore Institute of Management (SIM)
	Stephen Riady Foundation		Singapore Airlines

このほかに Partner Organisations も多数

■質疑応答

徳田：ホワチョン校が中心になって 13 回やっているのはわかったけど、もともこの学校はどういう学校なのですか。

中塚：その話は次に用意しているのでそこまでいきましょうかね…。
その前にリーダーズサミット関係で質問があれば。

笹原：学生たちは他の国の学生とグループになっているのですか。

中塚：そうです。配布した冊子には、日本の生徒たちが関わったグループで何をやってどんなことを感じたのかが書かれています。全部で 8 グループなので、日本人が入らなかったグループも二つあります。今回附属から参加した 3 名は子どものころ海外での生活経験がある者ばかりで英語はペラペラ。麻布の 3 人は逆に…

村本：一人だけ 2 歳の時にドバイにいたけど関係ありません。今回麻布は英語ができる子へのご褒美ではなく、がんばっている子たちの中でチームワークを大事にするタイプの子を選んだという感じです。

笹原：選考に興味があります。大勢の応募者から選ばれるのですか？ どのように？

村本：今回は 13 名の応募がありました。基準ははっきりとはありませんが、英語の教員 2 名と私で選考します。なぜ参加したかを英語でのスピーチとレポート。レポート点と面接点、あとは人間関係をみます。仲良しではないけど調和を大事にする。

中塚：うちは何人ぐらい応募があったのですか？ 最初からグループ討議？

浅見：30 人ぐらいですね。3 グループに分けて、グループごとにテーマが与えられ、大学の先生が来て英語でのディスカッションの様子をみていただく。英語だけでなくディスカッションをうまくリードできるかどうか。それと、いまは校長先生、前は附属学校教育長に面接してもらっていました。

鎌倉：今年はたまたま校長先生だったけど、もとは教育長にお願いしていました。来年どうなるかはわかりません。

中塚：本校では筑波大学の先生方に評価してもらう形です。校内の教員は選考には関わりません。これもいろいろ議論がありましたね。

鎌倉：内部でやると情が働いてしまうので、内部はかかわらないことになりました。

村本：毎回もめますよ。何で僕じゃないんだと、泣きながら親子で言ってくるのもあります。

Ⅲ. 主催校の HCI (Hwa Chong Institution ホワチョン校)

1. 歴史

主催のホワチョン校とはどのような学校なのでしょう。2006 年の初参加の際、学校 HP をもとに整理したものをもとにご紹介します。

■Raffles Institution (1821 創設) と並ぶ、シンガポールの、別格的エリート校

■タン・カーキーが創設 (1919) した The Chinese High School と、シンガポール初の政府助成学校として創られた(1974)Hwa Chong Junior College が合併して 2005 年に創設。2019 年は創立 100 周年！

■現在、以下の 4 つの部門を持っている

1. ハイスクール＝セカンダリースクール (4 年制)

日本でいう中学 1 年生～高校 1 年生まで

2. ジュニアカレッジ (2 年制)

日本でいう高校 2 年生～3 年生

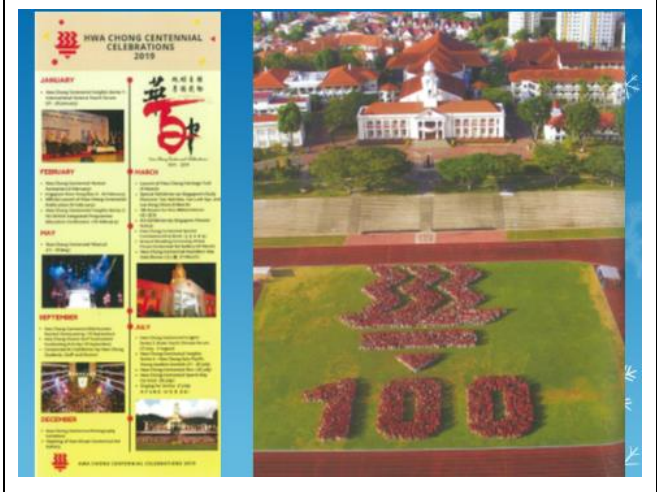
3. インターナショナルスクール (6 年制)

初年度生 (2005) は 12 カ国 90 名

4. ボーディングスクール (寄宿学校)

HCI の在校生だけでなく、卒業生や他校の生徒も受け入れている

HCI の中心に「クロックタワー」と呼ばれるシンボルタワーがありますが、その前にタンカーキーの銅像があります。その銅像には次のようなことが書かれています。



タン・カーキー (1874~1961) は、東南アジア地域の Chinese Primary School の上級学校として、華人中学の設立を 1918 年に呼び掛けた。華人コミュニティのリーダーたちはこの提案を熱烈歓迎。この地域の華人たちから金銭的援助を得て、1919 年 3 月 21 日、The Chinese High School (華人中学) 設立。

これ以降、各分野に多くの優れた人材を輩出し、この地域の人材育成に多大なる貢献をした。

70 周年を機にこの像を建立した。

大戦期、シンガポールを拠点として中国に援助していた華人が日本兵に追われ、大量虐殺につながったという話がありますが、タンカーキーは追われていた華人の中心人物の一人です。何とか戦後まで生きのび、東南アジア全域にいる華人を金銭面で支援した人のようです。この人の名を冠した駅がこの学校のすぐ隣にできています。

今年が 100 周年なので、1 月からずっといろんな行事がありました。今西さんが 3 月に出かけたときも何かやっていたと言ってたよね。

今西：ちょうど大きなイベントが終わった直後でした。たぶんこの写真のあとで、このグラウンドに、みたことないような、サーカスみたいなテントが建って、パーティみたいなのをしたと言っていました。

2. 理念

Vision, Mission & Values は次のとおり。

Our Vision

Empowering our students to Live with Passion and Lead with Compassion

Our Mission

We nurture leaders in Research, Industry and Government to search in nation

Our Core Values

- ・ 自強不息 Tireless Self-Improvement with Tenacity, Innovation and Passion
- ・ 己立立人、己達達人 Win-Win
- ・ 飲水思源 Remembering Our Roots and Honouring Our Benefactors

いろんな分野にリーダーを出すのだということですね。

「自強不息（じきょうやまず）」は、東京の十字女子中高と同じです。

「己立立人、己達達人」は論語から。自分が立つのではなく人が立つ、自分が達するのではなく人が達せられるようにするという意味だそうです。

「飲水思源」は、水を飲んだ時はそのルーツを思いなさいということ。

校内のいたるところにこれらの言葉が掲げられており、自分たちの大事な価値をいつも自覚できるようになっています。

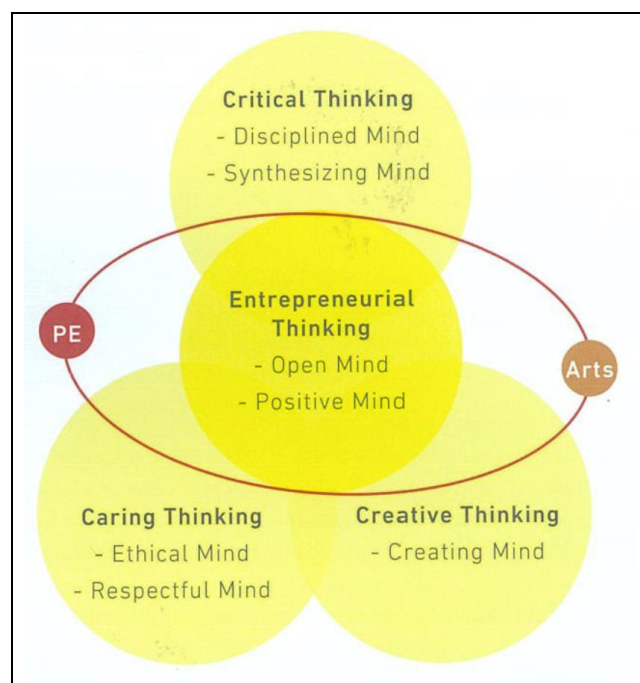


学校の教育方針はこのような図で説明されました。PE（体育）や ART（芸術）もものすごく重視しています。

第3代首相のリー・シェンロンは、百周年記念誌にこのような言葉を寄せています。

HCI students live with passion and lead with compassion. They are strongly influenced by the school culture and ethos. Much of this comes from the generations of educators who have served the school, and changed the lives of the students for the better.

「しっかりやってまっせ」ということですね。



3. 施設・設備

HCI の敷地はものすごくでかい！

この地図の左下手前、ブキティマロードをはさんだ反対側に、南洋女子中があります。



HCI の全体図

ここからは学校の施設をみていきましょう。

ボーディングスクールは 2006 年とあまり変わっていません。APYLS 参加生徒の部屋を覗いてみました。3 人部屋は管理が悪くていつもあいています。

教師が泊まった部屋はベッドが二つあって一人で使えます。教師も相部屋となる国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムの引率よりもはるかに楽ちんで快適です。

食堂の脇から HCI のハイスクールの方向を見た写真を 2006 年と 2019 年で比較してみました。2006 年に比べ、インターナショナルスクールの建物が大きくせり出しているのがわかります。

クロックタワー周辺は変わりありませんが、人物像や彫像物が増えているのを感じました。



ボーディングスクール（寄宿学校）



国際学校の建物が大きくせり出していた



このような彫像がいろんなところにできていた



陸上競技場は 13 年経って少しくすんだ感じ



スタンドには大屋根が設置されていた

陸上競技場は、2006 年に来たときはできたてだったのか、ものすごくきれいな印象がありましたが、いまは少しくすんだ感じがします。スタンドは全部屋根で覆われていました。われわれが帰った週明けに、HCI の全生徒と南洋女子の合同大運動会があるのだそうです。

ホワチョン自慢のプールは 2006 年からあり、プール横の建物の中に、学校外の人也能るレストランがあると言っていました、ここもリニューアルされています。学校が持っているプールです！



2006 年には立派なプールとレストランがあった



レストランが入っていた棟は新しくなっていた

インターナショナルスクールは 2006 年の時点ではできたてのほやほやでしたが、いまその前には、コート面が広がっています。



インターナショナルスクールは13年前と変わらず



新しくスポーツコートができています

寄宿学校からてくてく歩いて行くと、自強楼、つぎに思源坊、このあたりが中学生（HS）の敷地。



自強楼。ハイスクールの敷地



思源坊。ハイスクールの敷地



2006 年にミニサッカーをやって遊んだコート



2019 年も同じようにあったけど…

2006 年、サウジアラビアのサードさんたちと HCI の生徒と一緒にミニサッカーをやって遊んだコートはいまもそのまま残っています。けどその先に広がっていた天然芝のスペースは、人工芝に変わっていました。今年でオープン 5 年目だそうです。



いまでは人工芝のグラウンドが広がっている



奥が新しくできた JC の建物。体育施設は充実！

左の写真を撮った JC の建物自体が 2～3 年前にできたばかりで、全体的に JC 周辺の施設が新しくなっている印象を持ちました。

2006 年に人生初のスカッシュを体験したのもこの建物の中でしたが、いまスカッシュ場は HS の方に移ったそうです。

13 年もたつといろんなところが変わるのだなあと感じました。変わらないのはうちの学校。110 回生の在校中から変わらないし、関さん（104 回生）が高校の時から変わっていないかも…。

4. 教育制度・学校生活

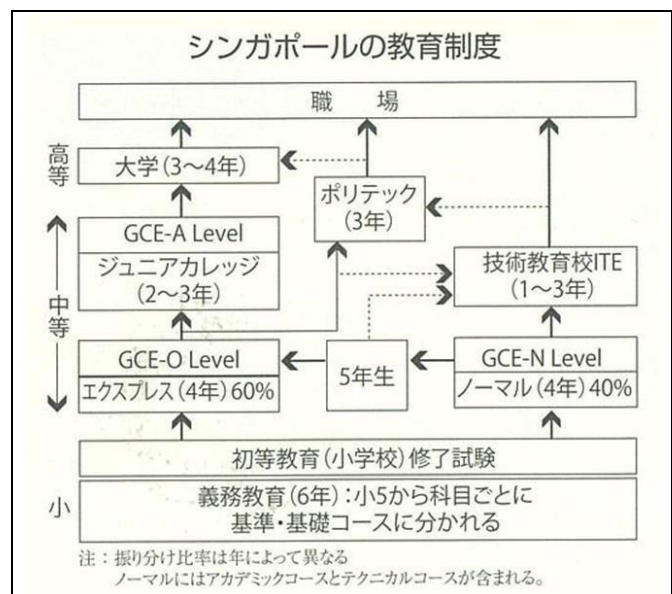
■シンガポールの教育制度

シンガポールでは小学校（プライマリースクール）が 6 年制。すべての小学 6 年生（11 歳）が受験する「初等教育（小学校）修了試験」で、生徒は成績によって中学校の、①エクスプレスコース、②ノーマル／アカデミックコース、③ノーマル／テクニカルコース に分けられる。ほとんどすべての子供たちはこの試験に合格するために、低学年から宿題や塾通いに忙しい。

大学は 2015 年で 7 校（国立は 4 校）であり、同世代の 25%が大学生となる。政府はこの進学率を 2015 年末には 30%とするため、大学の収容人数を増加させた。

参考：『シンガポールを知るための 65 章【第 4 版】』2016

注）同書の初版は 2001 年 10 月で『～60 章』だった。第 2 版は 2008、第 3 版は 2013



■HCI の生徒について（HCI の先生にお聞きしたこと）

- ・華僑中学（HCI-HS）は 7, 8, 9, 10 年生の 4 年制。生徒は各学年約 400 名で計 1,500 名ほど。体育教師は 10 名。道路を隔てた南洋女子は HS のみ。1,400 名。JC はなく HS のみ。卒業生は HCI の JC へ進学する。
- ・ジュニアカレッジ（JC）は 11, 12 年生の 2 年制。生徒は 2,150 名。PE 教師は 12 名。400 名が HS から、400 名が南洋女子中から、400 名が外部から進学する。
- ・11 月に National Examination（NE：全国試験）がある。その前に School Score や特技などが書かれた「調査書」が届く。
- ・特技を持った生徒の入学枠があるが、NE の点数が悪ければ入れない。
- ・JC 初年度は 2～6 月が前期（Term1・2）、7～11 月が後期（Term3・4）。2 年目は 1～6 月が Term1・2、7～11 月が Term3・4。初年度は 11 月に NE（全国試験）があり、進学のドタバタがあるので 2 月始まりとなる

中塚：たまたま体育教官室で話を聞いていたタときにソファの上に書類が置いてあって「これ何ですか？」と聞いたら「調査書だ」とのこと。少し見せてもらいました。

特技を持った生徒の枠で入学する場合も、NE で点数が取れないと HCI には入れないそうです。

笹原：調査書は小学生の時のことからいろんなことが書いてあるんですか？

中塚：中学のことはあったけど小学校のことは書かれていなかったように思います。ちゃんとみていないのでわかりませんが。

笹原：中国では「答案」というが、小学校からずっと持ち越されて会社に入ってもずっと持ち越されるものがあります。

中塚：へー。あるのかもしれないですね。

■学校生活（HCI の先生にお聞きしたこと）

- ・毎週月曜日の朝 7:30 から、陸上競技場に全校生徒 4,000 人と教師 400 人が集まって Morning Assembly（朝礼）。月曜以外はカレッジ、ハイスクール、インターナショナルスクールのそれぞれで朝礼を行う。授業開始は 8:00。
- ・毎週木曜日だけははじまりが 8:30。各教室で放送による朝礼。木曜日は少しゆっくりできるので「ほっとする」そう。放送集会も、起立 → 国歌 → モットーの唱和
- ・授業は月～金。授業の時間帯はクラスによって異なる。
- ・通常のランチブレイクは 50 分間。17 時まで授業をする日もあるが 2 時過ぎのランチブレイク前後で終わる日もある。
- ・毎週火曜日と金曜日は授業が 14:30 に終了。CCA と呼ばれる特別カリキュラムに取り組む。生徒は何らかのスクールチームに属して活動、教師も一つのクラブの顧問となる。武術やフェンシングは「外部コーチ」による指導となる。CCA も必修なので、教師が指導する。その指導とは「行き過ぎはないか」という観点。学業とのバランスが求められ、勉強そっちのけで放課後の活動に取り組むことはできない。日本の「部活動」に近いが、正規のカリキュラムである。

中塚：月曜朝の全校集会では国歌と校歌の斉唱があります。国を大事に、学校を大事に、親や地域社会

を大事にするというのをいろんなところで感じました。

CCA は日本で言う「部活動」にあたるかもしれないけど、カリキュラムに位置づけられているところが大きく異なります。教師の指導は「行き過ぎはないか」という指導なのだそうです。過熱気味の日本とは違っておもしろいですね。対抗戦はあるけど、学業とのバランスについてはすごく言っていました。

CCA の様子です。左上は彼らが「フリスビー」と呼んでいるアルティメット。左下の女子サッカーは、この日は1年生しかいなかったんで人数はこれだけ。それでも2人の先生がついて指導していました。いずれも体育の先生ではありません。

2006年に軍隊式の活動をみたので思わず写真を撮ったのが右上です。今回も銃を使った活動でしょうか、実際にやっているところをみました（右下）。

CCAの一覧をもらいました。

JCの一覧表の分類は、Sports & Games CCA (24) と Service & Enrichment and Visual & Performing Arts CCA (22) があり、いずれにも External CCA が位置付けられています。前者にはゴルフとセーリング。学校の中ではできないものでしょう。後者には Singapore Youth Flying Club と Uniformed Groups があり、それらを全部合わせると 50 クラブあることになります。

HS も同様に、先生の名前と E メールアドレスまで入った一覧をもらいました。こちらは Sports & Games (16)、Uniformed Groups (4)、Aesthetics (6)、Clubs and Societies (10) に分類され、合計 36 クラブの名前が載っています。HS のリストには External CCA はありません。生徒はいずれかの CCA に属し、週2回の活動を行っているとのこと。



■HCIの体育の授業

1) JC (Junior Collage) の体育

- JC は 26 人ずつ 95 クラスある。クラス替えはない。9～10 クラスが同時進行で授業を行う
- PE は週 1 回、90 分授業
- 通常は朝 8:00～9:30 と 9:30～11:00 のふた枠で行われる（木曜日は始まりが 8:30 なので少しずれる）。11 時以降はあまりにも暑いので体育の授業は行わない。11 時から 15 時は運動禁止！
- 体育の授業後には 30 分のブレイクがある。生徒はそこで腹ごしらえ。30 分のブレイクがあった日はランチブレイクがないのでここで食事をする。朝食をとる時間がないまま登校している生徒もいるので、



食堂はいつも人でいっぱい。運動着姿が多い

PE 後にながっすり食べる生徒が多い。

- ・ JC 初年度は 2～6 月が前期 (Term1・2)、7～11 月が後期 (Term3・4)。2 年目は 1～6 月が Term1・2、7～11 月が Term3・4。JC 初年度生は、前年 11 月に NE (全国試験) があるため、進学のだタバタがあるので 2 月始まりとなる。
- ・ Term1 と 2 はクラスごとに必修でいくつかの種目をローテーション。Term3 の 7～8 月は選択実技。いまはその時期。Term4 は再び必修。このサイクルで回る
- ・ 選択種目は、タッチラグビー、アルティメット (フリスビーと呼んでいた)、ネットボール (ドリブルなしの英国式ゲーム)、フロアホッケー、バドミントン、バレーボール、卓球。



体育館でバドミントン (JC)



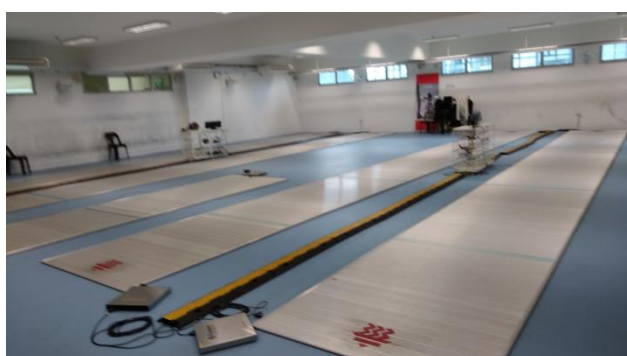
体操場で体つくりのトレーニング (HS)



東南アジアのダンス。この講座では学校外から講師を招いて授業を行っている(JC)



フロアホッケー (JC)。雨が降ってもスポーツができるスペースがいたるところにある



フェンシング場が校内にある！ (JC)



器械体操場もある！ (HS)



この日は柔道の対校戦。南洋女子の生徒が朝から HCI の HS 柔道場に来ていた



柔道場にはもちろん嘉納治五郎。「この方は本校の元校長」を伝えたと、案内の先生は驚いていた

2) HS (High School) の体育

- ・ HS は 1 クラス 35 名 (1 学年 400 名なので 10 クラス強か)。クラス替えは 2 年ごとに行う。男子校。
- ・ 必修と選択の配置は、基本的に JC と同じ。
- ・ HS では水泳は必修。50m 泳げなかった者は、JC で水泳を続け、泳げるようにならねばならない (できないまま終わる生徒もいる)

■質疑応答

笹原：HCI の生徒は華人だけですか？

村本：富裕層はどうしても華人が多くなるので華人が多いですが、マレー系の人もあります。学費を払って入れる人の割合は華人が多くなるのでしょうか

中塚：英語で会話しているけど、お互い同士は中国語でしゃべることも多いようですね。

笹原：マレー系が入るとお祈りの問題が出てくるのでは…

村本：マレー系の先生方もお祈りしている感じはありませんでした。ゆるい感じでしょうか。

中塚：授業の時間帯がみんなバラバラなのが印象的でした。日本の学校だったら全員一緒に動きますが、あるクラスはランチブレイクであるクラスは授業やっているような感じで交錯しています。短期留学の引率に行ったときは学校の中は覗けましたか？

今西：授業見学もしました。やっぱり交錯している感じですね。生徒も 8 人ぐらい行って全員分のスケジュールをみたけど、あっちこっちへ行って移動、移動、移動。受ける授業によって教室も全部違う。朝早くからみんなモリモリ食堂で食べている感じ。

鎌倉：ホームルームがないからね。

今西：ホームルームはないみたいです。写真にあった集会場の広場のベンチみたいなところで HR をやると言っていた。

古澤：カリキュラムは自分で組むのですか、それとも与えられたもの？

村本：どうなのでしょう。基本は与えられているみたいですが、コース別になっています。たとえばイギリスの大学に入っていくための最短コースを学ぶカリキュラムが組まれている。理科系だったらこうというように。最短コースでカリキュラムが組まれているから、必要ないものをみんなでとることはこの学校にはないと言われました。

古澤：興味・能力・志向などをみて教師が指導するのですか？

村本：このコースを選択したことはこれでいって、スコアはこれ、というようになっている。よい面も悪い面もあると言っていました。

古澤：進学先は？ 中国やアメリカ？

村本：イギリス志向が強いようなことを聞きました。

中塚：国内の大学もいるだろうけど、海外志向はものすごく強いですね。

村本：ベースは海外へ出て、いいものをシンガポールに持ち帰る。出して持ってくるという視点で育成しています。出て行きっぱなしはイメージしていないです。

中塚：第1回目の AYLS に参加した 116 回生の天野君。私が担任した生徒ですが、彼は「日本の高校生は日本のトップ校に行くことしか考えていないけど、ここに来ている高校生から出てくる大学名はハーバードやエールやケンブリッジといった名前。日本の高校生と違う」と言っていました。そのことに触発され、彼自身ハーバードに行きました。大学院はスタンフォードで経済学を学び、いまどうなっているのかな…。

鎌倉：ハーバードで先生になっている！

笹原：それに関係するけど、APYLS に参加した生徒たちはその後リーダーになっているのですか？

鎌倉：HCI100 周年にあたって、第1～2 回目に参加した筑波大附の生徒の追跡調査をして教えてほしいと言われ調査しました。すると日本で就職している者もいるけど、ほとんどが海外留学に行っています。天野君もそう。沢村君はフランス。志村さんはドイツに留学して BMW に就職。海外志向が強くなって目的は達成されたと言えるでしょう。HCI でも、第1回のファシリテーターだったリサはオックスフォードの医学部です。ある意味 APYLS は成功していると言えるでしょう。HCI でもこれだけ長く続くと思ってなかったかもしれない。始めたころは。

中塚：いまでは HCI は、これを含めて7つの国際プログラムをやっているそうです。各プログラムに代表者として参加する生徒が伸びるだけでなく、ファシリテーターとして関わる子が伸びる。7つのプログラムは、教員も生徒もみな担当が替わり、いろんな人が関わりながらサポートしているそうです。

笹原：私は大学院生の時に、いまでいう内閣府の青年交流事業の通訳として中国派遣団に参加しました。

青年の船など。あれは日本政府がカネを出して国際交流のリーダーを育てようとした事業です。そのとき参加した人といまも交流があるけど、いま国際交流に関係なくなっている人が多いですね。日本の税金はどこへ行ってしまったんだろう。そういうのと比べると、これはいいですね。レベルの高い人たちを集めているからなんだろうけど。

IV. 13 年ぶり 2 度目のシンガポールで感じたこと－“変化”と“壁”と“危機感”

1. “変化”と“危機感”

残り 10 分ぐらいですが、感じたことをざっとしゃべって少しばかり意見交換し、四川料理屋になだれ込もうと思います。

“変化”のところはこちらの冊子にも教師のコメントとして書きました（本報告 p.31 参照）。

今回いろんな人から聞かれました。「13 年間でどこが変わった？」と。

施設が新しくなったというのがありますが、それ以上に感じるのは HCI の生徒の関わり方ですね。今回の APYLS はほとんど生徒が中心となって進めていました。ここが第 1 回大会との大きな違いです。

第 1 回は教師も試行錯誤で、いろんなところで教師が出てきていましたが、今回、たとえば政府機関に代表者を派遣するにあたっての交渉も生徒がやったと聞きました。13 年間の積み重ねがあるからだとは思いますが、そういうところもファシリテーターの生徒がやっているのがすごいですね。

そうは言っても放任ではありません。教師は生徒を見守り、導き、上手に乗せながら伸ばしているという印象です。中心となって指導にあたった Lim 先生はじめ教師集団の力もすばらしいと思いました。

こういうのを日本でやってない、やっていかなアカンなあというのが“変化”と“危機感”の話です。

2. “壁”と“危機感”

二つ目の“壁”は、毎回思うけど言葉の壁。いんちき英語で、体力で乗り切っているだけではアカン。13 年前はフットボールを一緒にやれば何とかなったけど、もうちょっと言葉のレベルを上げていかないとダメということを改めて感じました。英会話に通ったりして細々とやってきたつもりですが、シンガポールの人たちのメチャクチャ早い英語には太刀打ちできません。アジア人だけの時はまだええけど、イギリス、オーストラリア、南アフリカなど日常的に英語を使っている連中に普通のスピードでやられるとダメですね。なんとかせなアカンと感じました。

今回はそれだけでなく、もっと感じたのがジェネレーションギャップです。とくにスマホ中心の、いまどきの高校生のコミュニケーションにはついていけません。

まず困ったのは、予定がすぐ変わることです。たぶん高校生同士は、スマホですぐに連絡がつくから簡単に変更するのだろうけど、朝の集合時間の変更を夜中の 12 時ぐらいにラインかなんかで送られてきても大人は対応できません。ファシリテーターもそれぐらいはわかっているので、教師用に紙一枚を用意して、それぞれの部屋に毎晩、予定表の修正版を届けてくれていました。

そんな形でコミュニケーションはとっていたけど、変更や修正の多いあのペース、そのスピード感にはついていけないということと、「そんなんでええんか！」という思いがあります。いまどきの高校生は、すぐに連絡が取れるものだからか、すぐに前言撤回します。一つひとつの判断が軽すぎる！

こういうことを、“壁”“危機感”として感じました。

笹原：アジアのビジネス同士のつながりは「ワッツアップ」というラインみたいなのでやっています。

村本：ワッツアップはないと使えない。

3. “危機感”の正体

“危機感”ということ言うと、ホンマに思ったけど、彼ら（シンガポールの人たち）は本気で人を育てています。次世代のリーダーを。

では俺たち、たとえばこの学校（筑波大学附属高校）はそういう人材を輩出する学校ですが、本気でやっていると言えるのか…。やれていないなあと思いました。

おまけスライドは、南アフリカのクリフトン校の先生が APYLS 期間中、他の引率の先生方にご案内していたものです。「クリフトン・インターナショナル・ユースサミット」。来年の 5 月ごろ、アフリカ初のリーダーズサミットを企画したので来てもらえないだろうかという話です。HCI みたいにお金が集まるわけではありません。ホームステイですが本気で人を育てようと企画し、進めています。

もう一つ、AYLS が始まったころの HCI の校長、アン先生からいただいたご案内です。アジアの G6 という名のリーダープログラムを計画しているけど筑波大学附属高校に参加してもらえないかという話です。校長含め国際部の先生方にこの情報を流して検討してもらいましたが、まず今年の 11 月に開催というのはあまりにも急だし年度途中なので無理。今後については継続審議することを伝えました。G6 のメンバーになると交替で主催しなければならないのがネックのようです。

とにかくこういう動きがある！

後追いではないけど、こういう動きについて行かないと手遅れになってしまうという“危機感”、それとこちらが先手を打って何かやっつけていかなアカンというのも感じています。

で、オリパラ教育につながっていくわけです。2020 年を機に…。

来月の月例会は、国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（国際 YF）の報告です。以前から「国際 YF を東京五輪後の 2021 年に日本でやろう！」との話をいろんなところでしてきたのですが、2021 はキプロスに持って行かれました。けど近い将来、日本で開催したい。その前にアジア YF をやろうという話をしています。

いずれにしてもこのままではアカンのちゃうかなと思っています。

V. ディスカッション

小池：サロン 2002 に参加したきっかけは、地元のサッカー少年団への関わりがあります。それ以外に、クーベルタン-嘉納 YF の手伝いをさせていただきました。今日こちらに参加したのは、私自身の今の仕事のアジアとの関わりが強く、シンガポールの方々がアジア全域をカバーしており、シンガポールの教育制度は見落とせないと感じたことにあります。日本の銀行の監査部に 6 年間いた中で印象に残っているのは、NUS（シンガポール国立大学）がコンプライアンスやガバナンスのルールを守ること以外に、内部監査の観点から、いかに大学の質を変えていくのかに取り組んでいるということです。自分たちの世界だけでなく、最先端のビジネスで使われている手法を大学改革に取り入れています。アジアの中で日本は先を走っていたはずだけど、競争の中では出遅れているのではないかと心配しています。より多くの人たちと共有しながらアクション起こさないと手遅れになってしまうと危機感を感じています。

野口：いま順天堂大学スポーツ科学部で助手をしています。私の知り合いの知り合いに、独自で高校から学生を東南アジアで移動しながらやるカリキュラムを作っている方がいて、日本の高等教育では世界で戦える人材が育てられないのではと、文科省の方針に疑問を持っている方がいます。今日の話聞いて、世界で戦う人材を育てるために、早いうちから国内だけでなく世界を見据えてやっている新興国もあるんだなと感じました。

ワッツアップやラインの話ですが、大学生とコミュニケーションを取るとき、最近はメールで連絡しても帰って来ません。学生ときちんと話をしようとするラインでやり取りすることが多いです。いまの学生話を聞いていると、たとえばベンチャー企業の社長とコミュニケーションをとるとき、ツイッターのダイレクトメッセージを送ってネットワークを広げていく学生が多い。きちんと連絡するときは電話で、メールで伝えるべきだと指導することが、大人になったときの彼らにフィットするのを感じました。彼らのコミュニケーションを大事にすることが必要なのではと、いま自分の中で迷っていることを思い出しました。

中塚：深いですねえ…

徳田：HCI の高校生は、日本みたいに教室の掃除とかするんですか？

今西：やらないと言っていた気がします。中国系の方ではない方がすごくいっぱいいらっしゃって掃除をしています。

鎌倉：インド系、マレー系の方たちが草取りなどをしょっちゅうしています。それでいいのかという気はするけど…

徳田：そうすると日本の方がいいんじゃないでしょうか。

小池：どちらかというとアメリカもイギリスも階級社会だから、学校に通うこと自体がそもそも普通の生活を送っている人たちとは異次元の世界。分業が成り立っています。どっちがいいかは別として、日本の方が世界から見ると特殊なのではないでしょうか。

笹原：日本の学校っていつまで生徒が掃除しましたっけ？

徳田：高校までじゃないですか。闘莉王が、日本に来る前はゴミを散らかして平気だったけど、日本の学校で掃除をやるようになったから「俺は捨てなくなった」と言っていました。

中塚：日本はベルギーに負けたときに更衣室をメチャクチャきれいにして帰ったことが世界中から称賛されました。「これは日本の教育のたまものだ」というのがありましたね。

徳田：バスケットでもやって、同じですよ。5 連敗して帰ったけど、きれいにして帰った。

中塚：最後に村本さんと鎌倉さんから。

村本：確かに私はリーダーシップの教育ということについては中塚さんと同じようにすごいと思う。一方でうちの生徒が学内報告会で言っていたことは、結局英語というツールが優先課題になっているので、英語でやる、ある種の議論パターンがテンプレートになっている。そうすると結論はだいたい一緒。一見文化が違うからいろんな人が集まって多様性と言っているけど、使ってるワードは一緒。自分は英語があまりできないけど、最後に理解できたのは、出てくる言葉に意外性がないから。その辺の言葉を適当に並べておけば、へーすごいなと言ってくれるんだ、気が楽になったと言っていました。そっちに向かうのはどうかと思うけど、私にとってはおもしろいコメントでした。

グローバル化の悪い点は、アジアの人間にすると英語を勝ち取った人間、あるいは先ほどのツイッターなど、ツールを勝ち取った人間のテンプレートですべてが回って行って、今回のサミットでは私とか中塚さんは情報弱者の側だったけど、すごく置いて行かれてしまう。そこに対して彼らはすごく鈍感です。本当のリーダーは、SDGs が話題ですが、世界の人々がもれなく、どう救われるかを考えること。ツールを勝ち取って、負けてたまるかというのはありだと思うけど、置いて行かれる人がいることを振り返ることができるのか。国際交流ではそこが大事だと思っています。ラインとかでコミュニケーションをとるけど、どこかでアナログな部分は持っていたいし、自分たちが楽しいだけじゃないということにどこかしら気付かせたい。その意味で、彼らが帰国して、メンタルヘルスについてそれぞれの学校で、APYLS でやったような方法で議論をして報告するイベントをやるのですが、改めて、英語ができない子たちと同じテーマで話をしたときに、果たして HCI で出会った人たちと違うワードが出て来るのか、気づきがあるのか。決まりきった英語の議論ではない、母国語の議論の中で別の視点が出て来るのか。母国語の良さもあると思っているので、それらとタイアップをどうやっていくのかを感じています。

鎌倉：先ほど南アフリカの学校からの提案が紹介されましたが、同じようなことが 13 年前、2006 年の AYLS のときにもインドのゴータマさんから、ムンバイの学校でやるのでぜひ参加してほしいとオファーがありました。南アフリカでもインドでも。先進国でないところで、海外へ出ていこうという流れがもう 13 年前からあった。そういう意味で言うと、中塚さんの危機意識はよくわかる。同時に、私は国語の教師だから、日本語できちんと討論できる子どもがどれくらいいるか。討論できない子どもたちが増えている。そのところがさみしい。

中塚：ありがとうございます。話は尽きませんが、この場所は尽きますので。もう少し動ける方は近くの中華屋へ動きましょう。

来月は、皆川さんがだいぶ昔に行った国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムの報告です。フランスに引率で行かれた自由学園の先生に報告してもらいます。

本日は会員でない方も大勢来てくださいました。入会してくれると月例会の案内が届きますのでぜひ。それと、釜石土産があるのでどうぞ。

以上。続きは「旺達」で

補足① 2019APYLS 参加国・参加校 (Delegation 73 名 Facilitator 26 名)

- ◆Australia (3)
 - Brisbane Grammar School
- ◆China (9)
 - The High School affiliated to Xi'an Jiaotong University
 - The Second High School Attached to Beijing Normal University
 - Wuxi Big Bridge Experimental High School
- ◆Finland (3)
 - Helsinki Normal Lyceum, University of Helsinki
- ◆France (3)
 - Institution Saint Joseph
- ◆India (6)
 - Bishop Cotton Boys' School
 - Vasant Valley School
- ◆Indonesia (4)
 - Binus School
- ◆Japan (6)
 - Azabu Senior High School
 - Senior High School at Otsuka, University of Tsukuba
- ◆Malaysia (3)
 - The Malay College Kuala Kangsar
- ◆Philippine (3)
 - Philippine Science High School Main Campus
- ◆South Africa (6)
 - Clifton School
 - Durban Girls' College
- ◆South Korea (3)
 - Bugil Academy
- ◆United Kingdom (3)
 - Wycombe Abbey School
- ◆United States (9)
 - Dominion High School of America
 - Scarsdale High School
 - Staples High School
- ◆Singapore (12)
 - Hwa Chong Institution (4)
 - Catholic High School (1)
 - CHIJ St Nicholas Girls' School (1)
 - Chung Cheng High School (Main)(1)
 - Clementi Town Secondary School(1)
 - Crescent Girls' School (1)
 - Nanyang Girls' High School (3)

補足② APYL2019 報告書「引率教員の所感」(中塚義実)

シンガポールから帰国してはや1ヵ月。遠い昔のできごとのように思えるが、滞在中のメモや写真をながめると、あの刺激的な1週間がよみがえってくる。13年ぶり2度目のシンガポールで感じた「変化」を中心に所感を述べたい。

13年前、2006年のシンガポール初訪問はAPYLSの引率であった。それは第1回大会であり、参加国はアジア諸国のみでAYLSと呼んでいた。筑波大附属高校にとって初の海外派遣プログラムで、複数の教師が帯同しており心強かった。前年に華僑中学とジュニアカレッジが合併して再スタートを切ったHCIにしてみれば、学校の方向性を示す重要な事業であり、いまから思うと試行錯誤の第1回大会だった。生徒用だけでなく教師用のプログラムも充実していたが、約2週間と長期間の研修なのでゆとりがあった。当時からファシリテーターの生徒が進行するが、教師が前面に出る場面も多くあった。学校を挙げてこの行事を形にしていこう意気込みと、手作り感があったのが第1回である。

1週間となった今回はゆとりの時間がほとんどなかった。朝から晩までぎっしり詰め込まれたスケジュール。生徒は大変だったろう。しかしよく準備されたプログラムには無駄はなく、スムーズに、また合理的に進められた。

それらすべてを準備し、進行していたのがHCIのファシリテーターである。政府機関や大学・企業訪問へのアポ取りも、生徒がすべて行ったらしい。先生方は表には出てこないが、主担当のLim先生はじめ、先生方が生徒と密に意見交換する姿をよく見かけた。「失敗から学ぶのです」と大らかにおっしゃっていたLim先生のオープンな姿勢が、生徒のやる気と前向きなオーラを導き出している。HCIでは2006年に始まるAPYLSを筆頭に、いまでは7つの国際プログラムを主催しているとのこと。担当する生徒は毎回異なり、教員も交替で指導にあたるようだが、こうした事業に本気でかかわることで生徒だけでなく教師が育ち、学校が成長するのだと思った。

アジア諸国だけでなく欧米や南アフリカからの参加者がいることで、雰囲気は大きく変わった。ひとことで言うと「英語圏の人たち」と「アジアの人たち」に分かれがちなる。言葉の壁はもちろんだがそれだけではない。附属高から参加した女子3名はいずれも海外生活経験があり英語は堪能だが、どのタイミングで口をはさんでよいのかに戸惑っているようだった。これは日本で友だちと会話するときも同じである。状況把握力と、口火を切るときの勢いが必要である。

言葉の壁とともに、IT技能や世代間の壁も感じた。情報は文書ではなく、スクリーンにQRコードが映し出され「ここをみてください」というスタイルである。皆がスマホをかざす姿に私はついていけなかった。けど引率教員の多くはついていけているようだ。前回の私は若手教師であったが、いつの間にか長老組となり世代間ギャップを感じた。「体を張って勝負する」年代ではない。

APYLSの変化を感じるとともに、シンガポールそのものの変化も感じたが、これはまた別の機会に。

いろんな意味で刺激的な1週間だった。また機会があれば関わりたい。

補足③ APYL2019 報告書「おわりに」(中塚義実)

「はじめに」にあるとおり、この報告書は関係校の教員、生徒、他関係者だけでなく、今後、同様のプロジェクトを企画しようとする方々にも参考にいただければと考え、作成した。

参加した生徒にとって一生の思い出になることは間違いない。そして、このような行事を主催することでより大きな学びや成長につながることを、HCIのファシリテーターの生徒たちを見ていて強く感じた。

期間中、南アフリカのクリフトン高校の先生からClifton International Youth Summitの案内があった。2020年4月23日～5月1日にダーバンで初開催するサミットは、南アフリカのみならずアフリカ大陸

で唯一のものであり、数年間の準備を経てようやく開催にこぎつけたという。APYLS のように政府や企業の多大なバックアップがあるわけではないし経済事情も異なる。渡航費は参加者負担、現地ではホームステイ、食費の一部負担も求められる。それでも高校生を育てるためにこのような場を設けようとする姿勢が素晴らしい。そういえば 2006 年の AYLS でも、インドの先生から同様のサミットを計画している話があった。多くの国で「ひとを育てる」ための企画が実践されている。

日本ではどうだろう。「ひとを育てる」ことに関して、それも「これからの時代に求められる」ひとを育てることに関して、もっと議論を深め、力を注いでいかねばならないのではないだろうか。この機会に「グローバルリーダー」と「グローバルシチズン」について改めて考えてみたい。

この報告書が、議論のきっかけになれば幸いである。